

学 位 請 求 論 文 要 旨

牛島春子研究—「満洲」は彼女にどう作用したか—

平成 27 年 6 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

鄭 穎

研究課題

「満洲国」は戦前・戦中の一時期、多くの日本人にとって、ロマンチズムのシンボルであり、絶好の亡命先でもあると見なされていた。少なからぬ知識人が混乱の内地を嫌い、逃れて「満洲」の地を踏んだ。牛島春子はまさにその中の代表的な女性である。彼女は「満洲」に渡る前に、日本で左翼運動に参加して、検挙され、さらに入獄した。「転向理由書」を書かされ、新天地「満洲」に逃亡した。一九三七年短編小説「王属官」で「満洲文壇」にデビューし、続いて一九四〇年「祝といふ男」を書いた牛島春子は、「満洲」で名を馳せた女性作家である。「王属官」は第一回建国文学記念賞を受賞し、演劇や映画に脚色され、漫画にもなり、大いに反響を呼んだ作品である。それに「祝といふ男」は芥川賞次席となって、高く評価された。私の調査では、「満洲」時代、牛島春子の作品は少なくとも三本中国語に訳された。それを極めて珍しいことである。彼女は単なる旅行者ではなく、約十年間植民地に住み、内側から「満洲」を見ていた。また、夫の特権的な身分による業務上の便宜もあり、副県長夫人として多種多様な事件をまのあたりにする事も多かった。それらを取材源にして、一般の市民と違い、より深く「満洲」社会の真相を掘り下げられる立場にあった。しかも、引揚後、牛島春子は横田文子、八木秋子など沈黙を選んだ女性作家と違い、継続的な執筆活動があったため、研究者にとってその思想変化を読み取ることが可能である。

近年、「満洲文学」の研究が進展、牛島春子文学の意義が問われつつあり、評価が高まっている状況の中で、新資料を発掘・援用し、新たな研究を展開する環境が整いつつある。牛島春子の知られていない作品はまだ多く、彼女についての研究の基礎作業は形成途上である。限られた資料で牛島春子文学の全容が見えにくい恐れがあるから、実証調査や散逸作品の収集が最も重要かつ基礎的なステップであると私は考えている。執筆に先立って、筆者は中国東北部のいくつかの図書館、日本の国立国会図書館、福岡県小郡の野田宇太郎資料館、福岡県久留米中央図書館、舞鶴引揚記念館といった、牛島春子とゆかりのある地と施設に足を踏み入れ、実地調査や資料収集をしてきた。さらに、「牛島春子年譜」の作成者坂本正博、『満洲・重い鎖 牛島春子の昭和史』の著者多田茂治など先学諸先生にもお目にかかり、お話を聞かせて頂いた。本学位請求論文は先行研究を踏まえ、実証研究の方法を用い、まず「牛島春子年譜」における事実関係を修正、補充を試みた。また、「牛島春子年譜」に載っていない、或いは未確認の作品を確認し、牛島春子の執筆目録を更新した。更に、ほぼ十年間にわたり、官僚夫人と女性作家という二重の身分で「満洲」に定住し、植民地や戦争の激動を体験してきた牛島春子の個人の記憶に焦点を当て、オリジナルな資料を用いて牛島春子の特質、性意識、「転向」への意識を検討した。牛島春子の記憶はどのように日本植民地文学に作用したか、また戦争、植民地支配はどのように牛島春子個人の記憶に投影したかを解明する試みをした。最後に牛島文学の中国語訳に注目し、その翻訳と変貌を考察し、「満洲文学」特有の実相を考察した。各部、各章の概要は以下の通りである。

論文の構成

序章では、研究の目的と意義を論じた上に、先行研究をまとめ、牛島春子研究の理由と必然性を述べ、本論文の新たな研究課題を取り上げる。

第Ⅰ部は一章からなる。歴史的な背景として、日本人女性の「満洲」移住・進出の機縁と歴史的展開を振り返り、「満洲」文壇の女性文学者としての表現と「満洲」崩壊後の運命をまとめる。

第Ⅱ部は四章からなる。戦争と植民地の激動を体験した牛島春子個人の記憶に焦点を当て、彼女の人と文学を詳細に検討してみた。

第一章では、「牛島春子年譜」における事実関係について修正と補充を試みた後、牛島春子の特質を考察した。第一節は、実地調査を踏まえ、渡満時期、川端康成との対面、引揚体験といった事実関係を究明し、「年譜」未確認の作品、或いは載っていない作品(八種)を確認した。第二節は「トランスジェンダー」と誤解されがちな牛島春子の性意識について、オリジナルな資料『手記—青空と自殺』、野田宛の書簡などを用い、これらと作品とを合わせて検証を行った。実は、牛島春子性意識の源は「反逆の心」にある。彼女は別に男に変身したい衝動を持っているのではなく、男でもいい女でもいい、因襲に束縛されずに、自由に生きていく人間になりたいと願っていたのである。

第三節は野田宇太郎の知遇を巡って考察した。牛島春子研究について、従来多く行われてきたテキスト分析のほかに、彼女の生活、思想を探る必要にも迫られていると感じている。彼女は生まれてから死ぬまでどのような人生を送ったか、どのような人と交流し、どのような考えを抱えていたか、それらの疑問を解くことが、作品の特徴や意味を正確に読み解くことにつながる。野田宇太郎は牛島春子からの書簡などの資料を大切に保存していた。それは小説やエッセーで窺い知れなかった春子の内面を伝える記録ともなっている。野田宇太郎は春子の終生の友であり、彼女の人生に多大な影響を与えた。野田は牛島春子の創作について助言し、激励し続けた。本論文は野田への書簡などの資料を生かし、川端康成との対面、女性文学についての考え、戦争へのスタンスといった重要な情報が読み取れる。

第四節は、牛島春子は文豪川端康成との不思議な縁を明らかにした。二〇一三年小谷野敦の研究書『川端康成伝—双面の人』は「川端が満洲で牛島春子に会ったのか確認はできない」と疑問を呈した。在満女性作家牛島春子と文豪川端康成は「不思議な縁」で結ばれ、親しくなり、戦中から戦後にかけて頻繁に交流をしていた。二人は共通の親友として、古賀春江、野田宇太郎、高田力蔵らがいるし、文学、絵画という共通の趣味まで持っていた。野田宇太郎と川端康成は牛島春子にとって、最も重要な知人であり、彼女の人生を導く縁を持った存在である。春子は川端を尊敬し、信頼している。同時に、自分の作品に自信がなく、ストレスを感じて悩んでいた春子を川端は全力で鞭撻し、支えていた。また、川端の戦争関与、植民地との関係については、二回の「満洲」訪問と特別特攻隊基地の報道班員体験に注目するだけでは物足りない気がする。前述したように、川端が牛島春子をはじめとする在満女性作家に積極的に働きかけたことも戦争関与の一側面ではなからうか。川端康成は在満作家を鞭撻したり、作品の出版を協力したりすることによって、「満洲」文学に

力を注ぎ、いわば、植民地主義を内面化していたのである。

第五節は曖昧に扱われてきた牛島春子の「転向」への意識を究明してみた。「転向」問題についての考察は日本人のマルクス主義体験のプロセスを顧みる面においても有意義なことであれば、在満女性作家牛島春子の本音を理解し、作品を解読する面においても基礎的かつ不可欠なものもある。ここで牛島春子の作品、書簡、自家版手記などのオリジナルな資料を叙述にしばしば援用しながら、牛島春子の出発の原点にも立ち戻り、彼女の「転向」意識を究明し、牛島文学の本質を考える。

第二章は牛島春子の作品から読み取れる「満洲」の世相を検討した。第一節は牛島春子が持っている性意識はどのように作品に投影したか、彼女の作品における女性像検討、特にフェミニズム思想について「満洲」に渡った後の変容を掘り下げてみた。第二節は「祝といふ男」「苦力」を取上げ、「満洲」における異民族接触の状況を考察してみた。ポストコロニアル理論を用いて、「祝」の内面を分析する試みをし、さらに牛島春子が「満洲」時代に、耽読したドストエフスキー「罪と罰」、魯迅「阿Q正伝」が「祝といふ男」に影響を与えていたことについて分析した。コロニアリズムによって被植民者の男性祝は象徴的に去勢され、ジェンダー化されるといえよう。家父長制に束縛されていること、裏切り（転向）の経験、ある意味では牛島春子は祝と同じ立場の人間であるから、祝に強い関心を寄せたわけである。

次に、中国の苦力を扱った。これは日本人を映し出す鏡であり、日本人のアイデンティティを再認識させる「他者」として書かれてきた。文学史上のいくつかの例と対照しながら、牛島春子の苦力描写を分析する。牛島春子は矛盾の統一体であり、苦力に対しても例外ではなく、牛島春子はヒューマニスティックな愛と差別感を共に抱えて対していたようである。

第三節では「ある旅」などの引揚作品を取上げ、実地調査を踏まえ、野田宛の牛島書簡と照らし合わせ、彼女の詳細な移動ルートを整理し、牛島春子の「満洲」引き揚げの実態を詳しく検討してみた。「ある旅」をはじめとする牛島春子の一連の引揚小説の主題はロマンチズムと人間性である。引揚体験は牛島春子にとって反省の契機を与えてくれた運命的な存在であろう。歴史外に追い出された浮塵のような牛島春子はアイデンティティの再構築に直面し、敗戦を無限な自由とロマンチズムという根本理念にむすびつけ、新しい冒険へのお出発として受け止めたと考える。

第三章は牛島春子文学の翻訳と変貌をあきらかにした。第一節は訳本「祝廉天」と原本「祝といふ男」の対照研究によって、「満洲」時代ならではの翻訳状況を検討してみた。第二節は中国語訳『王属官』の流転と変容を明らかにした。第三節は対応する日本語の作品がまだ見つかっていない中国語の作品「遙遠的訊息(遠くからの便り)」を紹介し、解読することにより、日本人に知られていない牛島春子の側面を究明してみた。最後に、資料調査、収集の経緯を明記した。

近年いちじるしく研究が進みつつある満州文学の代表的作家牛島春子について、中国人研究者としての立場を生かして在外資料の収集を行い、また、牛島の伝記の根本的再検討、ジェンダー論の積極的導入によるテキスト分析などによって、独自性豊かな論文となるよう努めた。